書　評

高橋長太郎
『所得分布の變動樣式』

一橋大學經濟研究叢書5　岩波書店

1955年7月　154頁　250圓

1

一橋大學經濟研究所が，戰後，雜誌『經濟研究』を中心に，日本經濟の研究といつも結びつきながら進めて來た仕事は，（もちろん色々註文はつけられるにしても，）たしかに日本の經濟學の發達の上で一つの劃期的な出來事であった。最近その仕事がだんだん實ってき，特に，「研究叢書」の形で，さまざまのすぐれたモノグラフィーが公にされるようになったことは，まことにおめでたい。特に高橋さんの『所得分布の變動樣式』については，多分長い間の苦勞を傾注された仕事と察しられるだけに，これまで寡作のこの著者に特に慶賀の意を表したい氣がする。

これまでの經濟學の中で，所得分布の問題は，あまり華々しい分野ではなかった。經濟的不平等は，間違いなく，注目すべき事實である。また，その分析のためのパレエトの係數αやローレンツ曲線などの工夫も，今の經濟學の一つの大切な常識になっている。しかし，こういう仕事は大抵散發的にしかなされず，また，そのための厄介な統計的操作は，觀察と數字の好きな特殊の研究者だけに委ねられることが多かった。

厄介で，しかもあまりエレガントな結果が得られそうもない，こういう仕事に骨折ることは，たしかに一つの冒險である。高橋さんが本書で試みられたのは，この冒險であった。しかも，高橋さんは，單に事實の觀察と數値計算とだけで仕事を終らせなかった。確率論の上に立ちながら，しかも社會科學の立場を忘れることなく，その操作を數理的に反省しようとした。また，經濟的厚生とか，所得の再分配のための財政政策とか，の觀點に立つことによって問題を正しく理論化することに努めた。更に，本書の最後に見られるように，確率論的接近，いな，對量的經驗的經濟分析に對する方法的反省さえ，まじえている。これはたしかに立派な仕事である。

2

本書の全體は10章と附錄とから成っているが，眞ん中あたりのⅥ「所得分布の變動」，Ⅶ「景氣變動と利潤集中」，Ⅷ「賃銀構造の變化」の部分から紹介をはじめるのが便利である。

ここでは，わが國の課稅所得，營業稅における納稅額，營業收益稅における純益金額，賃銀など，大正（時には明治）時代から引續いて統計資料のえられるものをえらんで，それらの年々の分布について，それぞれ，年々の平均・標準偏差・ジブラの係數 a（あるいは C），b を算出し，その分布の型と變動樣式とを調べる。

先ず，分布の型について，ジブラ（R. Gibrat, *Les Inégalités Économiques*, Paris 1931.）の方法を利用する。すなわち，所得分布の場合でいうと，所得金額別に累積度數分布をつくるわけだが，先ず，この場合，所得金額そのものではなく，その對數（くわしくいえばそれとその最低値 x_0 との差の對數）をとる。次に，普通の方眼紙でなく，確率紙をとり，この確率紙の上にこの累積度數の割合をプロットする。そうすると，幸いなことに，可成り規則正しく直線狀にならんだ點（殊に賃銀の場合）がえられることを，高橋さんは示している。專門家のいわゆる《對數正規型の分布》がこれであるか，正規分布を中心とする一般統計理論にこの社會經濟統計的問題が結びつく足場がここに出來るわけである。ジブラの方法をここまで廣く利用することは，わが國では，これまであまり試みられなかったようにおもう。この結果を出されたことは，この仕事の大きな功績といってよかろう。

經濟的不平等は，だんだん，消えて行っているか。これは誰れしもいだく設問である。本書が長い期間にわたる統計を丹念に蒐集・加工しているのもこの問題意識からであろうが，この研究によると，均等化の傾向はみとめられない，という。景氣循環との關係についていうと，高橋さんは，全體の水準を平均でとらえ，貧富の懸隔を「變動係數」（標準偏差/平均）で測り，兩者の間の平行關係をしらべるが，景氣の天井あるいは不況の底では，兩者は平行する（たとえば，景氣の天井では所得水準の上昇とともに，上下の開きも增す，というように）が，その途中の過渡期では逆行する，というのがこの研究の結論である。いろいろ資料の困難もあろうから結論だけ無雜作に利用することはできぬかも知れないが，これもたしかに本書の貴重な收獲の一つである。

以上で紹介したのは，本書の眞ん中の實證的研究の部分（第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ章）である。高橋さんは，この手の込んだ研究の前と後ろに，この問題の理論的考察をおいている。次にこの理論的部分を紹介しよう。

よく知られているように，數理的統計解析技術は，大體において，自然現象の觀察と結びついて發達したもの

であり，母集團の正規分布が前提できる場合，特に有效である。ところで，經濟現象の場合には，この技術が，そのままでは，あてはまらぬことが多い。早い話が時系列である。例えば，國民所得の累年の數字をならべたものがその時系列であるが，〈國民所得の大さの，正常分布をもった，或る母集團があり，與えられた國民所得の統計時系列は，それから無作爲に抽出されたサムプルだ〉という風に見ることができないことは，いうまでもない。そこで經濟時系列では色々の工夫が必要となるし，また，そこに經濟統計特有の色々の問題がおこるわけである。經濟統計の今一つの重要な側面，分布の問題についても同樣である。國民所得は國民の諸階層にどのように分配されているか，この問題についても，經濟統計に適した特別な工夫が必要となる。本書の第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ章で扱っているのは，この問題であり，しかも，この問題についての，まことにすぐれた概觀を提供している。實際，私は，この書物と前後して森田（優三）さんの『經濟變動の統計分析法』（岩波全書——これは經濟時系列の解析技術の周到な綜合報告である）も讀んだが，相ついで，こういう報告が出たことを感謝せずにはいられなかった。

さて，高橋さんのこの書物は，先ず第Ⅰ章で，分布の問題をあつかう場合，これと同時に，水準・順位も，相互關連的に取上げられねばならぬことを，問題の理論的・政策的含蓄から，明かにする。前にのべた，〈視野の廣さ〉という本書の特徴は，ここにもうかがわれる。

第Ⅱ章で，經濟的不均等を測る係數についてのこれまでの試みを體系的に概觀したのち，第Ⅲ章では，相對的平均偏差に重きをおくローレンツとジニの工夫を見，第Ⅳ章でパレエトとジブラの理論を論ずる。ここでの議論は，このパレエトの理論が需要法則への關心から起っていることを指摘するほどに行屆いたものであるが，正直にいって，ジブラの「比例效果の法則」の數理統計學的說明も，（何處ででもよいから）これと同じように，くわしくまとめてやって欲しい氣がした。（特に45頁から46頁への，6號活字での說明の部分などについて）。この第Ⅳ章の後で，第Ⅴ章で「階層區分と分配率」を論じた後，前に紹介した實證的研究にすすむ。

最後の2章（第Ⅸ，Ⅹ章）も理論的である。國民のいろんな階層で，所得の上昇がどこまで釣合のとれた形で行われているか，これが分布の問題で大切なことを，高橋さんは，第Ⅰ章で指摘するが，この調査は，資料の點で，非常にむづかしい。ただ，問題を理論的に圖式化し，統計的測定方法を工夫することは可能である。これをところみたのが，第Ⅸ章である。

さて，本書は，上記のとおり，〈ジブラの分布法則〉が，この問題に對して，決定的に大切なことを，わが國の資料への適用を通して，確認するが，このジブラ分布の重要さの資料的確認とならんで，その理論的考察が，本書全體の大切なテーマである。この意味から，本書の最後のⅩ「變動要因と確率成長法則」では，經驗的に非常に有益とおもわれるジブラの分布法則を，確率論的に基礎づけようとするマルシャックとカレツキの試みに論及して，今後の理論的展開を準備する。

3

最初敍べたように，高橋さんの基礎的訓練の廣さと深さとが，本書のいたるところに見られるが，同時にまた，この書物のために，高橋さんが，大變な努力を集中的に集積されたことも，本書の隨所で感じられるところである。

それだけに，私のように數字の觀察と計算とを苦手とするものにとっては，讀みづらい部分もすくなくない。たとえば，本書の附錄Ⅲに，ジブラ方程式の計算例と「ジブラが作った z（小文字）の表」とがかかげてある。この場合，前の部分の計算例の中での Z（大文字）の計算は，（高橋さんは別に何も說明されないが）すぐ後のジブラ自身の表ではなく，普通の確率積分の表を使ったものである。議論の全體からいうと當然のことだが，その點，はっきり，斷わってなく，然もすぐその後にはこの計算と關係深いジブラの表が出てくるのであるから，まぎらわしく誤解をまねきやすい。また，この計算では，最小自乘法で回歸直線をつくり，その係數として a, b が出てくるのであろうが，その點も一言ことわっておいて頂くと，一般讀者には，大變有難いのではないかとおもう。

こういう點は，著者が本書全體に拂われた苦勞にくらべると，わずかの努力で事足りることであるが，本書のような立派な仕事の一般的な利用價値は，それだけで，うんと大きくなるのであるから，蛇足ながら，御註文申し上げておく。

（青山秀夫）